

第2章 読書活動の現状と課題

1 第3次計画の検証

基本目標Ⅰ 家庭・地域・学校などにおける読書活動の推進

子どもが読書に親しむことができるよう、乳幼児期からの絵本の読み聞かせの重要性を啓発するブックスタート事業※1や赤ちゃんのためのおはなし会の開催、ボランティアとの協働による公民館等での絵本や紙芝居の読み聞かせ、幼稚園や保育園を巡回する特別団体貸出、小学校や中学校での全校一斉の朝読書や読書感想文コンクール及び読書感想画コンクールの実施、子ども司書養成講座の開催、テーマや年齢に合わせて市図書館が選書した本の福袋の提供など、さまざまな事業を実施し、読書活動を推進しました。

目標の達成状況

項目	当初値 平成26年度	目標値 令和2年度	実績値 令和元年度	達成度
子ども司書の養成 人数－①	26人	50人	10人	未達成
児童書及び絵本の 貸出冊数－②	576,410冊	630,000冊	574,493冊	未達成

- ① 平成27年度まで、1日限りの司書体験の「一日子ども司書」と、3回連続の養成講座として「子ども司書養成講座」を実施していましたが、平成28年度から内容を見直し、3回連続講座に一本化して実施したため養成人数が減少しました。

なお、平成26年度の「子ども司書養成講座」受講者は2人でしたが、平成30年度以降は10人が受講しています。

- ② 令和元年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止対策による臨時休館により、令和2年3月7日以降図書資料の貸出はありませんでした。

休館しなかった場合は、令和元年度実績の1か月平均分約52,000冊を加え、約626,000冊の貸出があったと推計されます。

※1 乳児健診等の機会に受診した親子に対し、赤ちゃん絵本に親しむことの大切さや楽しさを保護者に伝えながら、絵本や読み聞かせのアドバイスなどの資料を配布する事業

基本目標Ⅱ 読書活動に関する理解と関心の普及

読書に対する関心を高めるため、春のこどもの読書週間や秋の読書週間に、読み聞かせや図書館探検など、ボランティアとの協働によりさまざまな啓発事業を実施しました。

また、読書の楽しさを知るきっかけづくりとして、小学生を対象に読書手帳※2を配付するとともに、市図書館ホームページやじどうしつだより※3、児童室だより※4、TC（ティーンズコーナー※5）通信※6で年代別におすすめの本を紹介するなど、図書に関する情報を提供しました。

目標の達成状況

項目	内 訳	当初値	目標値	実績値		達成度
				令和2年度 5月	令和2年度 9月	
不読率※7 -①		平成27年度	令和2年度	令和2年度		
	小学生	2.4%	2.0%	12.3%	11.3%	未達成
	中学生	8.0%	6.0%	3.9%	3.9%	達成
	高校生	47.5%	40.0%	45.4%	67.7%	未達成
こどもの読書週間、 読書週間行事への 参加者数-②		平成26年度	令和2年度	令和元年度		
		421人	600人	271人		未達成

- ① 今回は、新型コロナウイルス感染拡大防止対策による臨時休校中の5月と、通常の学校生活に戻った2学期の9月を対象に調査を実施しました。この結果から、学校生活の有無に関係なく、不読率は平成27年度の調査時より小学生では大幅な増加となりましたが、中学生では減少となりました。また、高校生では、5月は若干の減少となったものの、9月は大幅な増加となりました。
- ② 令和元年度のこどもの読書週間は、10連休により長期旅行等で来館者が少なかったため、また、読書週間は、特別整理期間とシステムの更新により10月末まで休館し、事業開催期間が短くなったため、参加者数が少なくなったものと考えられます。



基本目標Ⅲ 市図書館などの読書環境の整備・充実

読書の楽しさを知り、親しむことができるよう、市図書館ホームページでの新着本情報等の提供や、図書の予約等電子的なサービスによる利用促進を図るとともに、10代向けの図書をそろえたティーンズコーナーの設置やT C通信の発行をとおして、中学生、高校生の利用促進を図りました。

また、高蔵寺まなびと交流センター図書館との連携を進め、それぞれの長所を生かした運営を図るとともに、各図書室においては、児童書を始め図書資料の更新を進め、子どもの年齢に応じた読書環境の充実を図りました。

このほか、子ども自身が学習課題を調査研究し、解決を図っていくための調べ学習への支援として、学校への団体貸出を実施しました。

目標の達成状況

項 目	当初値 平成26年度	目標値 令和2年度	実績値 令和元年度	達成度
ホームページ アクセス数①	200,000件	250,000件	960,291件	達成
調べ学習に関する 支援②	0件	20件	14件	未達成

- ① 家庭でのパソコンやタブレット端末、スマートフォン等の普及により、ホームページのアクセス件数が伸びているものと考えられます。
- ② 学校への団体貸出による調べ学習に関する支援が、徐々に周知されてきているため、増加の傾向にあると考えられます。

- ※2 自分の読書履歴を目に見えるように記載することで読書意欲を高める、市図書館発行の手帳
- ※3 幼児やその保護者を対象に、幼児向けの図書や図書館での催事等を紹介する市図書館の発行物
- ※4 小学生を対象に、小学生向けの図書や図書館での催事等を紹介する市図書館の発行物
- ※5 中学生、高校生を中心とした10代の読者を、児童と成人の中間に位置する年代としてとらえ、この年代に読書の楽しさを知ってもらうために設置された、青少年を対象とした図書、雑誌、新聞などを集めた市図書館のコーナー
- ※6 中学生、高校生を対象に、中学生、高校生向けの図書や図書館での催事等を紹介する市図書館の発行物
- ※7 1か月の間に1冊も本を読まなかった子どもの割合

2 子ども読書活動の現状と課題

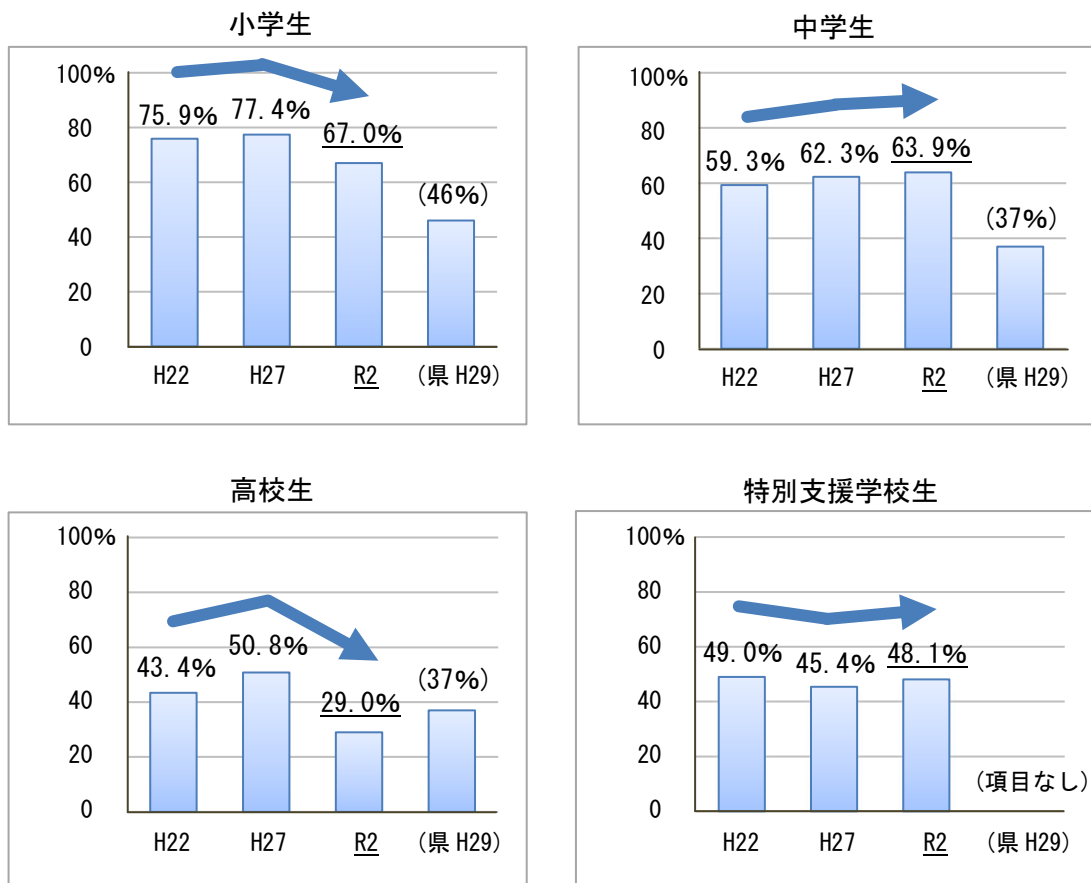
(1) 本市の読書を取り巻く現状

ア 学校段階が進むにつれて読書離れが進む傾向にある。

読書の好き嫌いに対する設問では、読書を「好き」と答えた割合が、小学生で67.0%、中学生で63.9%、高校生で29.0%であり、学校段階が進むにつれて読書好きの割合は減少しています。また、特別支援学校生も含めた児童生徒全体では57.0%で、前回(平成27年度)の調査と比較して、9.3ポイント減少しています。特に高校生の減少が顕著です。

なお、平成29年度に実施された愛知県子ども読書活動実態調査の結果と比べると、全体的に高い水準となっています。

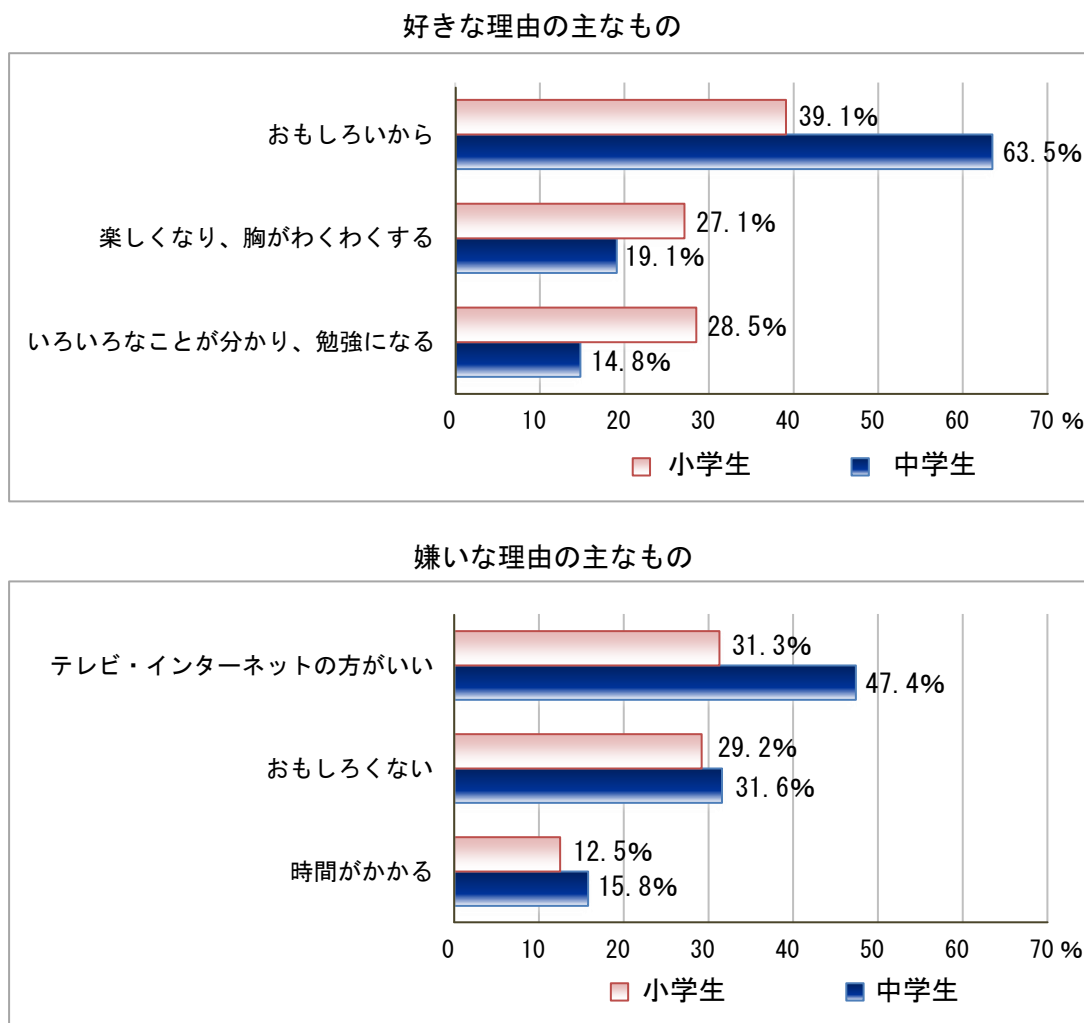
図1 読書が好きな児童生徒の割合の推移



※ グラフの横軸は、アンケート調査の実施年度

読書を好きな理由では、小学生、中学生とも「おもしろいから」が最も多く、嫌いな理由では、小学生、中学生とも「テレビ・インターネットの方がいい」が、最も多い回答となっています。

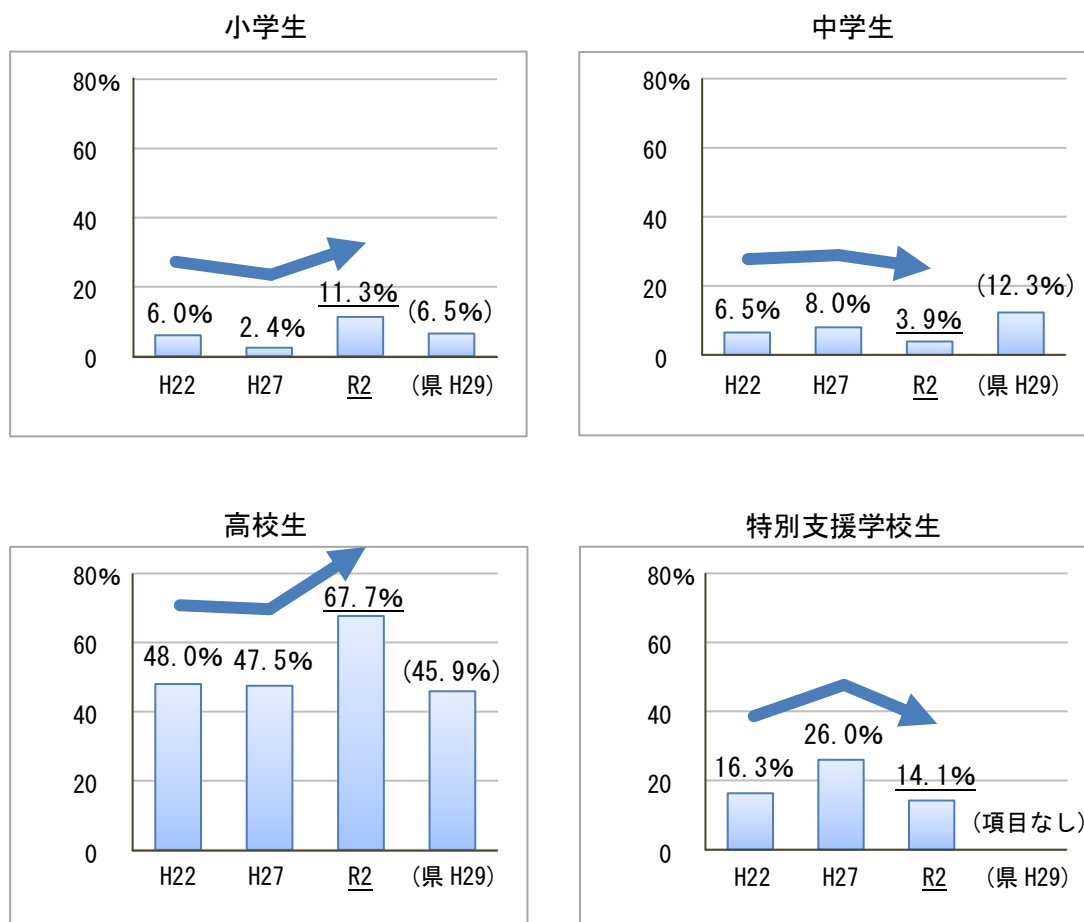
図2 読書が好きな理由と嫌いな理由



児童生徒の令和2年5月と9月のそれぞれ1か月間の読書冊数は、小学生では、「11冊以上」読む児童が、5月では23.8%、9月では33.9%と、いずれも前回より減少しているとともに、「0冊(読まない)」の児童が、5月では12.3%、9月では11.3%と、いずれも前回より増加しています。また、中学生では、「11冊以上」読む生徒が、5月では5.0%と前回とほぼ変わりませんが、9月では7.3%と前回より好転しています。「0冊(読まない)」の生徒については、5月、9月とも3.9%と、前回より好転しています。

高校生では、「11冊以上」読む生徒が、5月、9月とも3.5%と、前回より減少しています。「0冊(読まない)」の生徒については、5月では45.4%と、前回より好転していましたが、9月では67.7%と増加しています。

図3 不読率の推移

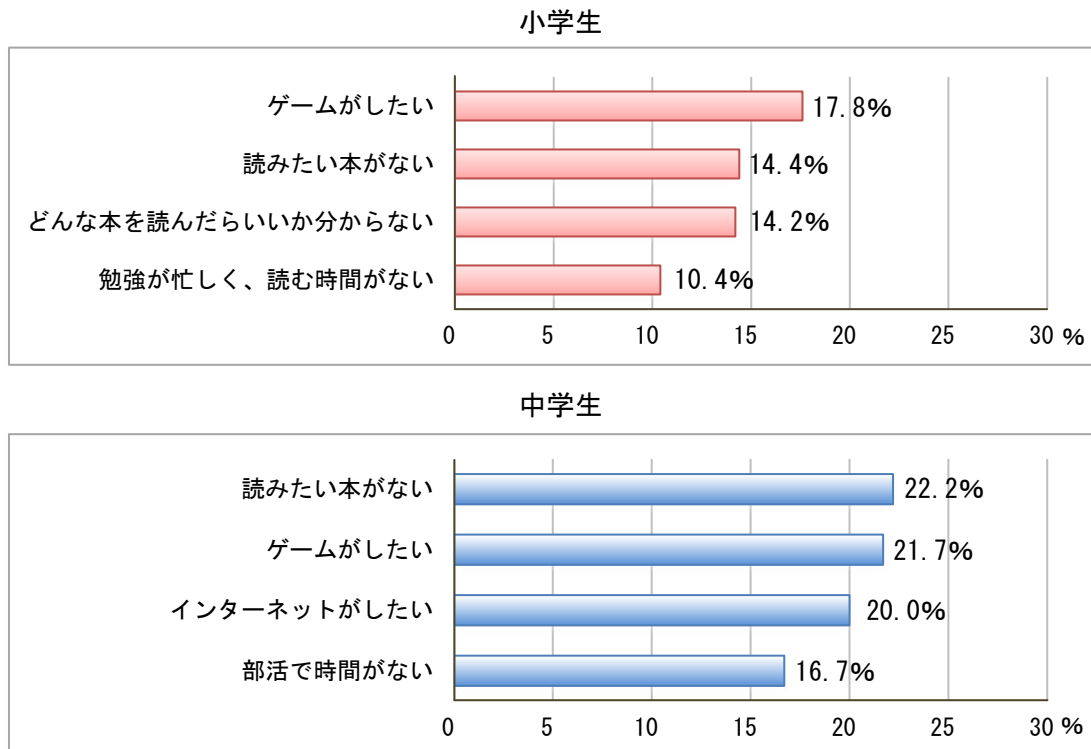


※ グラフの横軸は、アンケート調査の実施年度

※ 令和2年度は、9月を調査対象とした値

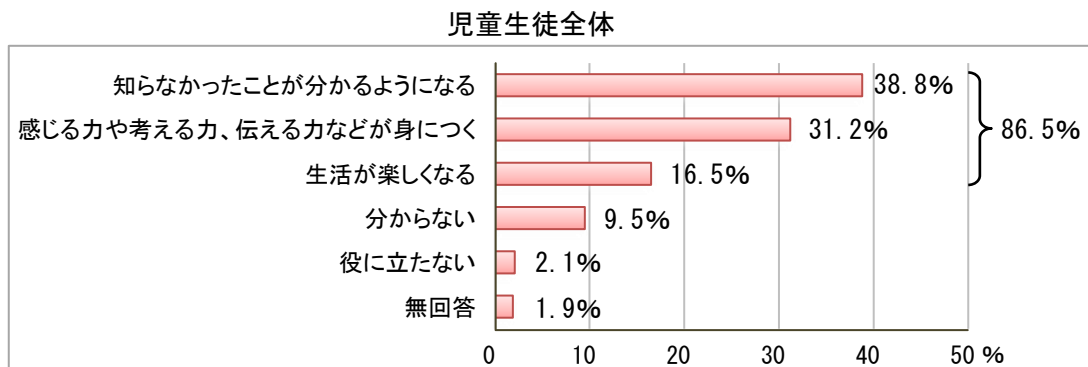
読書をしたくてもできない主な理由として、小学生では「ゲームがしたい」が17.8%、「読みたい本がない」が14.4%、中学生では「読みたい本がない」が22.2%、「ゲームがしたい」が21.7%となっており、読書以外に興味に移っていることが伺えます。また、小学生、中学生とも、勉強や部活で忙しく、読書する時間がないことが挙げられています。

図4 読書をしたくてもできない主な理由



しかしながら、「本を読むことは何の役に立つと思うか」の設問には、児童生徒全体で、「知らなかったことが分かるようになる」「感じる力、伝える力などが身につく」「生活が楽しくなる」との考えが全回答数の86.5%を占め、「分からない」「役に立たない」を大きく上回っており、読書が大切なことについては認識していると考えられます。

図5 読書が何の役に立つと思うかの割合



「どうすればもっと本が読まれるようになると思うか」の設問には、小学生は「面白そうな本を紹介する」32.7%、中学生は「本の値段を安くする」31.7%、高校生は「1日の中で本を読む時間をつくる」29.9%が、最も多い回答となっています。

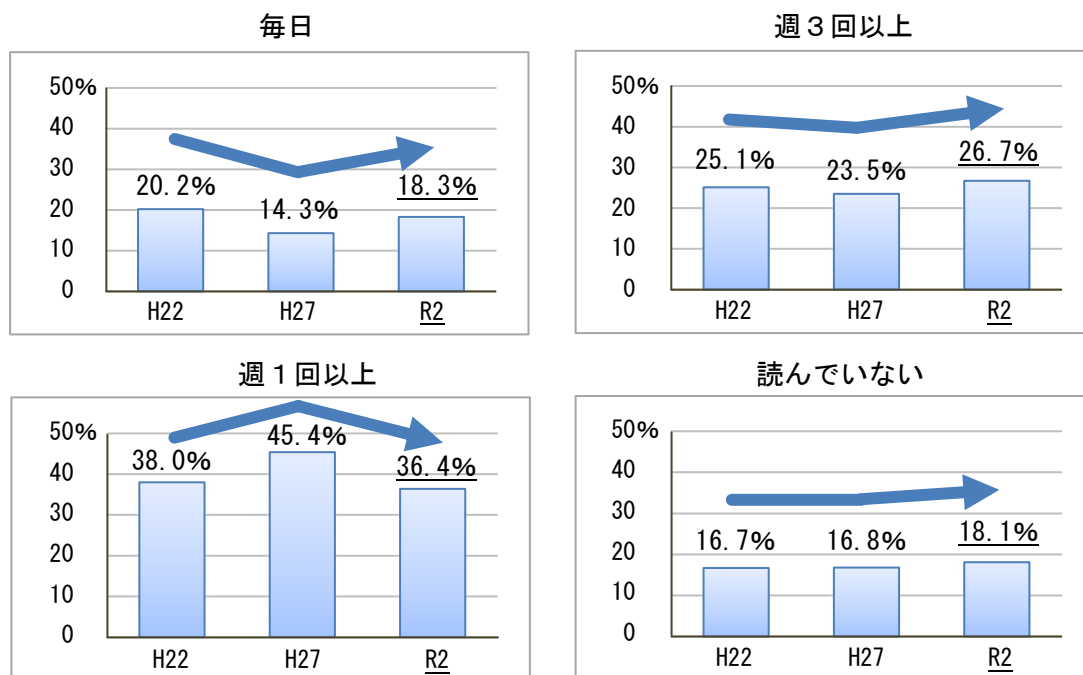
なお、タブレット端末やスマートフォン等の普及に伴い、電子書籍を読みたいと思う児童生徒が、小学生では53.4%、中学生では67.2%、高校生では58.4%と、いずれも過半数を超えています。

イ 家庭での読書活動の大切さを認識している保護者は増えてきているが、市図書館、図書室の利用につなげていない。

「子どもが本を読むことや本に興味を持つことは、子どもの成長に必要なか」との設問に、97.4%の保護者が「必要である」と回答しています。

これを反映してか、子どもに対して本を読む頻度は、「読んでいる」保護者の状況では、「毎日読む」が18.3%で前回から4.0ポイントの増加、「1週間に3回以上読む」が26.7%で3.2ポイントの増加、「1週間に1回以上読む」が36.4%で9.0ポイントの減少となっており、前回と比較して、読む回数は増加傾向にあるものの、「読んでいない」が18.1%で前回より1.3ポイント増加しています。

図6 子どもに本を読んであげたり、一緒に読んだりする割合の推移



※ グラフの横軸は、アンケート調査の実施年度

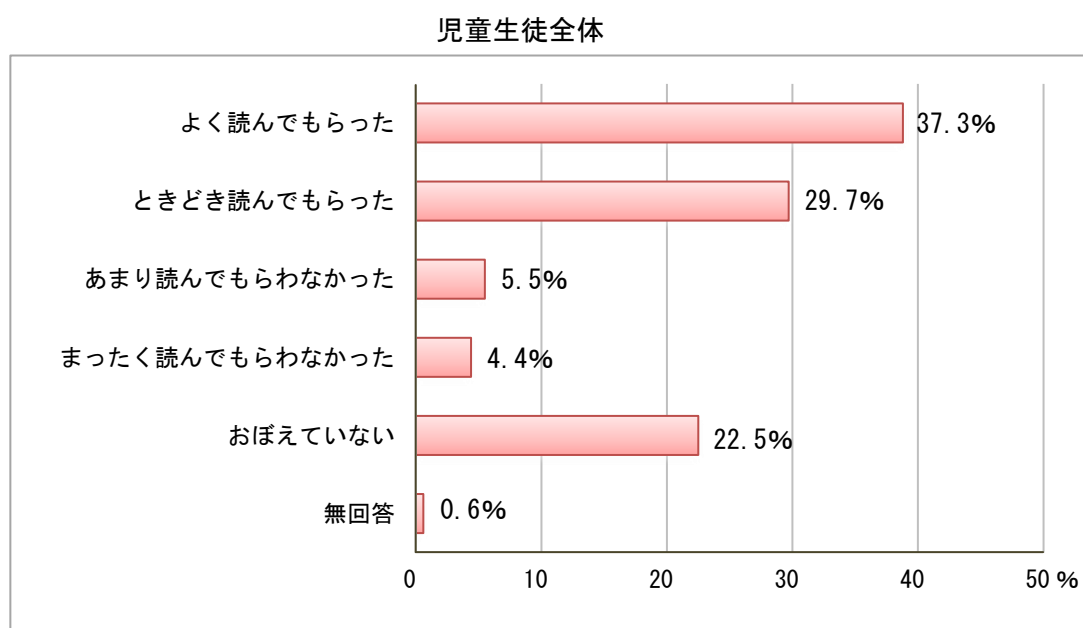
保護者の市図書館、図書室の利用については、前回より回数が減少し、「利用したことがない」人は59.3%で前回より4.1ポイント増加となっています。

「紙芝居とお話を聞く会」の参加状況については、33.3%が参加したことがあると回答しており、前回より5.7ポイント増加しています。また、開催を知らない保護者は25.5%と前回より6.8ポイント減少しており、読み聞かせ会等の行事が徐々に周知されてきているものと考えられます。

家庭での読書環境が、子どもの健やかな成長にとって大切であるという認識は醸成されつつありますが、読み聞かせ等を実践している保護者と実践していない保護者の差が広がっている傾向にあります。また、図書館が実施している事業への参加は増えてきているものの、市図書館、図書室を利用するまでには至っていない状況です。

なお、児童生徒への「小さいころ、家で本を読んでもらったことがあるか」の設問には、児童生徒全体で「よく読んでもらった」が37.3%、「ときどき読んでもらった」が29.7%となっており、本を読んでもらった体験のある児童生徒が6割を超えています。

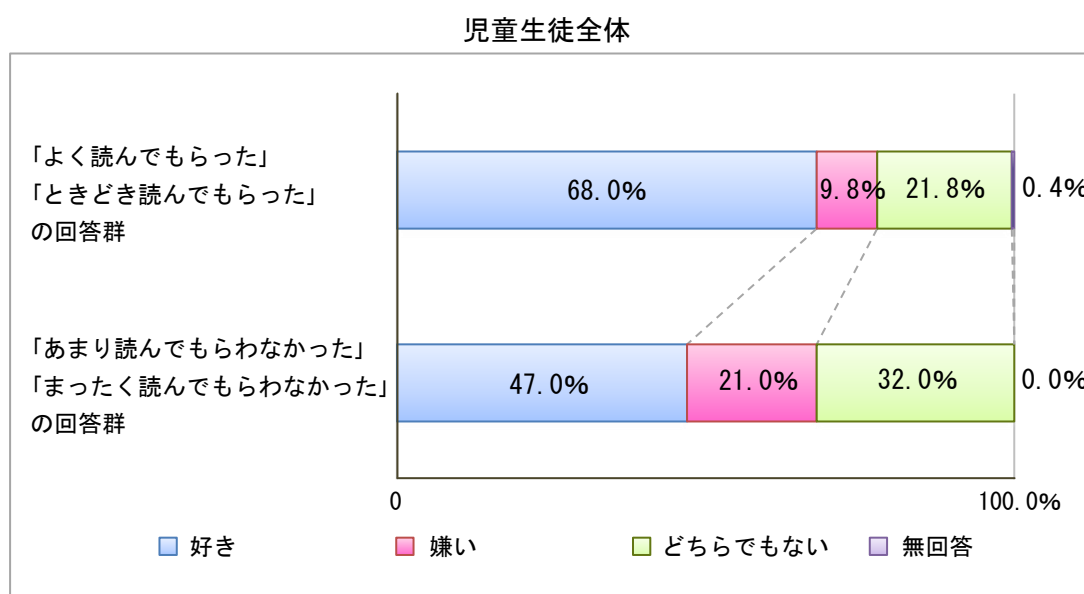
図7 小さいころの読み聞かせ体験の割合



「よく読んでもらった」「ときどき読んでもらった」と回答した児童生徒のうち、68.0%が「読書が好き」と回答し、9.8%が「読書が嫌い」と回答したのに対し、「あまり読んでもらわなかった」「まったく読んでもらわなかった」

と回答した児童生徒では、47.0%が「読書が好き」と回答し、21.0%が「読書が嫌い」と回答しており、それぞれ、21.0ポイント、11.2ポイントの差があることから、小さいころの読み聞かせの体験が、成長過程で読書が好きになることに少なからず影響を与えていることも考えられます。

図8 小さいころの読み聞かせ体験と読書の好き嫌いの関係



ウ 子どもにとって身近な施設である学校図書館の利用頻度が低い。

学校図書館の本の利用については、小学生では「自分の家の本」に次いで利用されていますが、中学生では「自分の家の本」「電子書籍」「市図書館、図書室」「学級文庫」の次となります。高校生では学校図書館を利用しない生徒が88.7%、特別支援学校生では65.4%となっています。

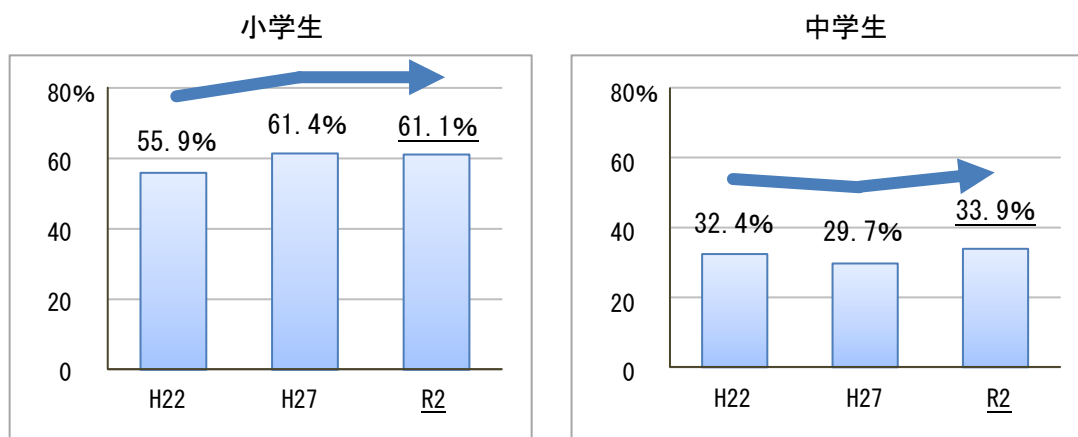
なお、高校生が学校図書館に希望することで最も多い回答は「もっといろいろな本を置く」で、55.4%となっています。

子どもにとって身近な存在である学校図書館が、あまり利用されていない現状が伺われます。

エ 市図書館、図書室のサービスの充実が求められている。

市図書館、図書室を利用している小学生は61.1%、中学生は33.9%、高校生は12.5%であり、小学生、中学生とも前回とほぼ同じで、学校段階が進むにつれて市図書館、図書室を利用しなくなっています。

図9 市図書館、図書室を2～3か月に1回以上利用している割合



※ グラフの横軸は、アンケート調査の実施年度

※ 高校生、特別支援学校生は、平成22年度、27年度のアンケートに当該項目なし

「読書が好き」な児童生徒は、小学生の67.4%、中学生の37.4%、高校生の14.9%が2～3か月に1回以上市図書館、図書室を利用していますが、「読書が嫌い」な児童生徒では、小学生が35.4%、中学生が10.5%、高校生が7.9%となり、読書の好き嫌いによって、市図書館、図書室の利用に差がありました。

しかし、「読書が好き」でも市図書館、図書室を利用しない児童生徒が、小学生で32.1%、中学生で62.6%、高校生で85.1%となっており、読書が好きであっても市図書館、図書室を利用しない児童生徒が少なからずいることが伺われます。また、学校段階が進むにつれて市図書館、図書室を利用しない傾向にあります。

市図書館に望む機能としては、小学生では「漫画やアニメがある」、中学生では「休憩のとき、友達とのおしゃべりや飲み物を飲むことができるコーナーがある」、高校生では「勉強ができる部屋がある」が挙げられ、保護者からは、「親子で読める本の充実」、「オンラインでの読み聞かせ」、「表紙が見える棚」等が挙げられています。

オ 市図書館と学校との連携や学校への支援が手薄になっている。

各学校では独自に読書活動を実施していますが、授業や学校行事等との兼ね合いもあり、小学校、中学校をとおして多数の学校で実施できている共通の活動は少ない傾向があります。特に、学校図書館の運営、活用に関するも

のについては、学校図書館ボランティアとの打ち合わせの時間が取れないことなどにより、運営や活用方法の検討に十分に携われず、実施ができていない学校が多い状況となっています。

また、市図書館が調べ学習への支援をしていることを認識していない学校もありました。

カ 図書館ボランティアへの支援、子育て活動関係NPO法人との連携が弱い。

図書館ボランティアについては、新しい取組への意欲はあるものの、活動内容等の周知がされていない、活動機会がない、会員が増えないなどの課題があります。

また、子育て活動関係NPO法人においては、読書は子どもの発達において重要と認識しており、読み聞かせをはじめとする読書活動を積極的に実施していますが、市図書館の利用をはじめ、お互いに接点がありません、有効な連携がされていない状況です。



(2) 計画策定に向けた課題

ア 読書離れへの対応

全ての児童生徒が、学校段階が進んでも読書が大切であるという意識を持っていることから、読書が好きという気持ちを継続できるよう、読書習慣の定着と読書時間を確保できる環境づくりへの取組が必要です。

また、情報化の進展に合わせ、電子書籍等新たな読書ツールを研究していく必要があります。

イ 保護者が本を手に取りやすい図書館の環境整備や読書活動の啓発の推進

家庭の読書環境は、子どもの健やかな成長に影響を与えることとなるため、保護者が子どもの幼いころからの読書活動の重要性を認識し、家庭における読書習慣の形成ができるよう啓発、推進していく必要があります。

ウ 学校図書館の利用促進

子どもにとって身近な存在である学校図書館において、少しでも読書や本に興味を持つことができれば、読書に対するモチベーションの向上が期待できます。そのため、学校図書館の環境をより充実していく必要があります。

エ 市図書館、図書室のサービスの充実

図書館に興味を持ってもらい、小学生、中学生、高校生、また子育て世代に至るまで、継続的に市図書館に足を運んでもらうため、施設内の整備やイベントの開催等を含むサービスを充実していく必要があります。

オ 市図書館と学校との連携や学校への支援の充実

図書館が実施している学校への支援内容をきめ細かく周知するとともに、学校での調べ学習や読書活動がしやすいように市図書館と学校が連携していく必要があります。

カ 図書館ボランティアへの活動支援、子育て活動関係NPO法人との連携

図書館ボランティアの活動が活性化するよう必要な支援を実施するとともに、子育て活動関係NPO法人とも連携して、子どもの読書活動を推進していく必要があります。